

土曜日に掲載します



厳島神社で舞われる「蘭陵王」。日本で洗練された舞楽だ
（柳川順子・県立広島大准教授）

中国の北齊王朝の皇子、高長恭に由来する舞楽「蘭陵王」は八世紀初め、唐から日本に伝えられた。都の貴族たちの間で盛んに舞われ、平安時代末には平清盛によつて安芸の厳島にもたらされた。

■中国では非正統的
仮面の下に女性のごとき美ほつを隠して戦い、武勇の名を天下にほせた蘭陵王長恭。彼を称えるこの舞は、数ある舞楽の中でもひときわ華麗なものだ。しかし意外にも中国においては、非正統的な「散楽」に位置づけられていた。漢族の伝統的な舞楽ではなく、西域の異民族からもたらされた音楽として、一段低く見られていたのである。その楽器編成も、わずかに三種類の西域系楽器から成る簡素なもの。衣装もおそらくは日本におけるそれとは異なっていた

蘭陵王のエキソチズム 独自に洗練された舞

平安時代に入ると、この舞は朝廷の中で左方舞として高く位置づけられ、貴族的な遊びの場面を彩った。ちなみに日本の「蘭陵王」が身にもつた襦袢は、唐朝においては雅楽（正統的音楽）に属する武舞の舞人の衣装であった。外來文化の魅力に強くひかれながら、建前としてはこれを非正統と位置つけた唐王朝。それに対し、異質なものを喜んで受け入れ、これを独自に洗練させた日本。「蘭陵王」の放つエキソチズムは、日本においてこそ鮮やかに磨き上げられたものだといつてよい。

この舞は、厳島神社の神事に際して奉納される舞楽の一つとして、年に数回ほど一般に公開されている。「蘭陵王」誕生の地では、すでに滅びて見ることはできない。

ひこしま 歴史回廊

第10部・厳島の文化①

ところがこの舞は、日本に渡来した後、華やかに変身する。「蘭陵王」を殊に好んだ高野姫（孝謙天皇）に仕えた尾張連浜主のアレンジ。また、このころ来日して雅楽の教師となった林邑（ベトナム）僧の仏哲が、東亞アジアの色づきを施した可能性も否定できない。

■年に数回一般公開
平安時代に入ると、この舞は朝廷の中で左方舞として高く位置づけられ、貴族的な遊びの場面を彩った。ちなみに日本の「蘭陵王」が身にもつた襦袢は、唐朝においては雅楽（正統的音楽）に属する武舞の舞人の衣装であった。